
一杯の珈琲

恵里香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一杯の珈琲

【Nコード】

N4032C

【作者名】

恵里香

【あらすじ】

明治時代に遡ったような喫茶店での緩やかな時間。

暖かな日差しが入ってくる窓際の席。外は街路樹が秋に染まっている。お気に入りの店、いつもの場所。会社から近く、休憩中はここに居る事が多い。古風な造りのそれは明治へと時を遡ったようだ。カチャリという音と共に珈琲を運んでくれたマスターが一言残して去っていく。初老と言っても良いだろう。微かに白髪が混じっているが、優雅な身のこなしでそれすらも彼の装飾する一部になっている。

目の前にある珈琲を口元へと持って行くと、ラム酒の香りが鼻をくすぐる。口に含めばラム酒の甘い芳香とは反した苦みが舌を転がっていく。

カロン、カラリ。扉を開け入ってきたのは、5分程遅れてきた彼女だった。彼女はすぐに俺を見つけ、目前に座った。肩に付きそうな黒髪が少し乱れている。急いで走ったのだろう、少し息も弾んでいる。マスターを呼んで、キャラメル・モカを注文している。彼女は必ず甘めの珈琲ばかり選ぶ。珈琲をいれている間も、俺と彼女との空間には豆を煎る音とまるで緩やかな一本の曲線であるジムノペディーが、ただ広がるのみ。

キャラメル・モカがテーブルに置かれ、彼女は口にした。暫くしてからぽつりと言葉が紡がれる。

珈琲を飲めば、先程より少し温度が下がっていた。俺はマスターが働いている物音や旋律が耳に届かなくなってくる。

会話が終わり、彼女が席を立つ頃には、珈琲も底にうつすらと琥珀色を見せるだけとなっていた。彼女の姿が見えなくなってから、最後を口に流し込むと、氷の様に冷たく感じた。

店を出る時に息を深く吸うと、珈琲の香気と一緒にゆったりとした調べが俺の中へと入ってきた。

（後書き）

ども、初めまして！この小説はサイトにも出しているんですけど一部が変更してあります。もし、挿絵もご覧になりたい方は『HOM E』からサイトへどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4032c/>

一杯の珈琲

2010年10月15日22時22分発行